

## Development of a nursing care problems coping scale for male caregivers for people with dementia living at home

西尾, 美登里

<https://doi.org/10.15017/1522379>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（看護学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	西尾 美登里
論文名	Development of a nursing care problems coping scale for male caregivers for people with dementia living at home (在宅で認知症者を介護する男性の介護問題対処尺度の開発)
論文調査委員	主査 九州大学 教授 大池 美也子 副査 九州大学 教授 加来 恒壽 副査 九州大学 教授 谷口 初美

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、男性介護者が在宅で認知症を有する人の継続的な介護と生活の質の向上していくために、介護問題対処尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検証することを目的とした。

日本の認知症高齢者数は、2025年に700万人を超える推計値が示されており、その介護にあたる家族や関係者は多大な負担を抱えている。特に、男性介護者は、日常生活や介護の負担感を抱えても、周囲の助けを求めないことや地域から孤立化しやすいなどの特徴がある。本論文は、在宅介護の長期化・高齢化するなかで増加している男性介護者に焦点を当て、男性介護者の抱える介護問題に対する特徴的な対処を尺度開発によって解明しようとするものである。

尺度開発の予備調査では、介護問題対処尺度案21項目が、男性介護者からのインタビューと認知症専門家によって作成された。その後、本尺度案は、受診患者の介護者や全国の「男性介護者の集い」の参加者などから募り、認知症を有する人を在宅で介護する男性759人を対象として調査が行われた。尺度の基準関連妥当性では、介護者の負担増加が、自尊心や自己統制力の低下を引き起こし、抑うつ反応などの症状につながることを前提として、Zarit介護負担尺度日本語版(J-ZBI)、Rosenbergの自尊心感情尺度(RSES-J)、うつ症状の重症度得点(Self-Rating Depression Scale: SRDS)が採用された。本調査結果の有効回答数は274人(36.1%)であり、介護問題対処尺度(21項目、3件法)は、正規分布を示し、天井効果は5項目、床効果は2項目であった。介護問題対処尺度の妥当性としては、J-ZBI、RSES-J、SRDS、と本尺度21項目中19項目に、また、各総得点において有意な相関が認められた。信頼性は、Cronbach's alphaは0.49で、約50%の安定性として判断され、本尺度は一定の信頼性と妥当性を有することが確認されていた。

本論文は、構成概念妥当性と信頼性に関する再評価の検討を要すると考えられるが、男性介護者の介護問題対処への着目は、認知症介護の問題に向けた新規性のある観点として評価できる。また、本尺度の開発過程は一貫性があるとともに、一定の信頼性と妥当性が示されており、男性介護者の介護問題とその対処に関する現状の解明と解決に高い意義あると考える。

論文公聴会では質問に対する的確な回答があり、本研究結果に関する今後の活用が明確に説明された。以上を踏まえ、主査・副査3名による議論の結果、博士(看護学)の学位に値すると認める。